京都大学文学研究科図書館蔵『詠百首和歌・詠二十首和歌』翻刻と解題

――足利義政百首と宗空二十首の紹介――

大山和哉
川上一

はじめに

文化将軍として著名な足利義政（一四三六―一四九〇）には歌人としても豊富な事績があり、百首歌をはじめとした定数歌も多く残している。ここに紹介する京都大学文学研究科図書館蔵壬生家本『詠百首和歌・詠二十首和歌』は、義政の百首歌のひとつを収める写本である。

本書は足利義政の百首歌と、同時代の宗空なる人物の二十首歌の合綴本である。井上宗雄氏によって存在・概略が示されて以降言及はなく(一)、全貌は今日まで不明となっていた。最近、閲覧の機会を得たので、ここに全文を翻刻、解題を付して今後の研究利用に供する次第である。翻刻は大山、川上が分担して行い、解題は一・二・四を川上、三を大山が執筆した。

《解題》

一　基本書誌

『詠百首和歌・詠二十首和歌』
（京都大学文学研究科図書館蔵壬生家本：一九・せ五）
寛永十五年（一六三八）　壬生紀学写　一冊

結綴。後装縹色無地の表紙（二五・七×一八・五糎）。もとは本文共紙の仮綴。外題は左肩に「左大臣源朝臣義政〈百首〉」と打付書（壬生忠利筆カ）。その右横に「足利義政百首」と貼題簽（四周双辺）に墨書（本文や左の打付書とも別筆）。右下には忠利の花押が付される。見返しより仮綴段階の外題が「義政将軍百首和歌」と見える（左肩打付書）。内題①「詠百首和歌」※足利義政百首（一オ）、②「詠二十首和歌」※宗空二十首（一〇オ）。料紙は楮紙、虫損あり。墨付丁数一二丁（うち①九丁、②二丁、奥書一丁）。遊紙前後各一丁。半葉一二行、和歌一首一行書。字高約二〇・〇糎。書写奥書「寛永十五年八月十三日／小槻紀學書

之」（一二オ）。

二　概要

冒頭触れたように、本書についてはすでに井上宗雄・中村文『中世百首歌　八』（古典文庫522、一九九〇）に概説がある。以下それに拠りながら、新たに得た知見を含め概要を述べる。

（1）足利義政百首

堀川百首題による。百首の後に「勅点愚点　五十五首」とあり、ついで御製（後花園天皇）[一]との贈答歌が付されるが、合点は残らない。位署に「左大臣源朝臣義政」とあり、義政が左大臣であった長禄四年（一四六〇）から応仁元年（一四六七）の詠である。点者の後花園天皇は寛正五年（一四六四）に譲位しているため、成立は長禄・寛正年間にまで狭められる。義政二十六歳から三十歳頃の作ということになる。義政の定数歌の中でも早期のものである。

完本は壬生家本以外に知られず、貴重であることは言を俟たないが、本文を精査するに、親本の状態や書写者の習熟度（後述）の問題もあり、少なからず誤脱が確認される。特に7番「梅」歌の上句、9番「早蕨」歌、11番「春雨」歌の脱落等は重大であるが、幸いこの箇所には残欠本が存在し、それを補いうる。

残欠本として知られるのは「春二十首和歌」・「冬十五首和歌」の各一巻である。室町期写。両者は同筆と思しく、もと一巻の写本であったとみられる。「春二十首」は学習院大学日本語日本文学研究室蔵〔請求記号：九一一・二五四・五〇一四〕。井上宗雄・山田洋嗣『中世百首歌　七』（古典文庫504、一九八八）にて「春二十首和歌（兼載）」[二]として翻刻されている。「冬十五首」に関しては原所蔵不明[四]。これら残欠本の本文については、本百首の成立に迫る写本である分良質であるため、翻刻においては、「春二十首」のみ校異を示した。

（2）宗空二十首

この二十首の伝本は壬生家本のほか知られず、現状孤本と呼ぶべきものである。二十題二十首。やや複雑な結題による組題で、習作としての色合いが強いように思う。

成立に関しては巻末の識語に明らかである。

右廿首和哥者、文明十七閏三中旬之比、右京亮藤原（山下）秀忠興行之、人数左衛門尉（伊勢貞頼）、藤原秀忠、以上三人、隠作者書之集之、室町殿（足利義尚）、于時御所様（伊勢）へ、御点被申也、六十首内、御点十一首出、貞頼（伊勢）四首（宗空）予五首、彼一巻者秀忠許在之、御詞之加候分書写之候者也、

文明十七年（一四八五）閏三月中旬、山下秀忠（一四四二―？）の主催で二十首和歌が詠ぜられた。参加者は伊勢貞頼（後に貞仍、一四五五―？）、秀忠、宗空の三人。詠歌の後、それぞれの作者名を隠して合写し、室町殿足利義尚に合点を請うた。計六十首のうち点は十一首にあり、内訳は貞頼四首、宗空五首、（おそらく秀忠は二首）であった。点の入った一巻は秀忠のもとにあり、宗空は自分の二十首に、義尚が加えた評語の分（本文1～3番歌にみえる）を写し取った、との由である。本写本は、この宗空自筆の「詠二十首和歌」を祖とする転写本と思しい。

作者・宗空は、伝未詳の人物で、古典文庫が指摘するように『義尚十二番歌合』に「沙弥宗空」とみえ、将軍足利義尚近侍の僧であったらしい事のほか、その素性は不明である。但し、二十首参加者の残りの二人、山下秀忠、伊勢貞頼は、ともに室町幕府奉公衆である(五)。宗空もおそらくは遁世した奉公衆の一人ではなかろうか。『実隆公記』文明十六年十二月五日条には、この三人が揃って高倉永継邸の歌合に参加している記事が見え、日頃から公私ともに昵懇の間柄であったことが推察される(六)。

ともあれ、こうした将軍近侍の武家の作歌実態が窺える資料は貴重であろう。本二十首成立の文明十七年当時、幕府において義尚を撰者とした和歌打聞『撰藻抄』の編纂が行われていたことはよく知られている。京洛ではそれに関連して、種々の作歌行事が催行されること頻りであったが、現存するものは多く義尚や公家主導のものであり、奉公衆等武家主体の興行が把握される例は稀である。本二十首の場合、参加者三名が詠歌の批点を主君の義尚に請うている点、彼らの作歌修練に対する積極性がうかがえる。打聞をはじめとした義尚の歌壇経営については、若き将軍の独善とうつることが多い。しかしながら本二十首の存在は、そうした活動が側近達の好尚に支えられていたことを示唆するものである。

三　収載歌について

「足利義政百首」に収録された和歌については、『慈照院殿義政公御集』(『私家集大成　第六巻（中世Ⅳ）』所収、以下「御集」）及び『慈照院殿御自歌合』(以下「自歌合」）に他出がある旨、『中世百首歌　八』に指摘があり、川上一『慈照院自歌合』の基礎的研究――附・宮内庁書陵部蔵桂宮本の翻刻及び校異――」(『三田國文』64、二〇一九・一二）においても他の定数歌等の出典と共に整理されている。既に言及のある歌は次の通り（御集の歌番号は『私家集大成』による。また、歌題の表記は本稿の翻字による)。

「藤」→御集一六六・自歌合十番右、「昌蒲」→御集一七三・自歌合十四番左、「昭射」(ママ)→自歌合十七番左、「五月雨」→御集一七六・自歌合十五番右、「氷室」→自歌合十七番右

なお他に「鹿」題の歌が初句を「心あらば」として御集一八七・自歌合二十五番右に収録されており、これも推敲を経た上での他出と見て良いだろう。

本百首と御集とで重なる歌について、その題を見ると、例えば本百首で「藤」題で詠まれた歌は、御集では「松藤」となり異なっている。同様に、「五月雨」は「川五月雨」、「鹿」は「田家鹿」となっている。この点については、御集編纂時に参照されたのが本百首ではなく、義政によって歌題を除かれた自歌合であり、そこへ御集編纂者が歌の内容から改めて題を付した結果であることが、川上「足利義政文芸資料考――家集および連歌資料について――」(『三田國文』65、二〇二〇・一二）において検証されており、参照されたい。

また、本百首には義政以外の詠及び義政以外のものと見られる詠が混じる。他の歌集に収録されていることが確認できたものは次の五題である。それぞれの歌が収録された歌集名及びそ

の歌集での歌番号（『言国詠草』のみ『私家集大成』により、他は『新編国歌大観』による）と共に示す。

「梅」→『延文百首』一七〇八（勧修寺経顕）[七]、「蛍火」→『後鳥羽院遠島御百首』夏二八（第五類本のみの特有歌）[八]、「槿花」→『草庵集』六〇五、「不逢戀」→『耕雲百首』六二、「祝」→『言国詠草』一九九

いずれの場合もなぜ本百首に入り込むことになったのか定かではなく、あるいは本百首から別の歌集へ竄入したものが無いとも限らない。当該伝本に誤脱が少なくないことから考えれば、ある時期に本文の多くが脱落した写本が存在し、その一部が何らかの理由で他者詠によって補われた可能性がある。

伝本が少ないこと、御集編纂時の撰集資料にもされなかったこと、他者詠が混じるものであることなどから、義政の百首歌として当該百首が完全な形で流通することはほとんど無かったようである。

さて、以上のことに留意しつつ、当該百首の詠まれ方の特徴を見てみたい。先述の通り本百首は義政の二十代後半の作と考えられ、この頃には既に和歌を愛好し、幕府でも公家・武家・僧の参加する歌会を催行していた。寛正三年（一四六二）には九月九日を起日として、藤原為家の「一夜百首」の組題を用いた百日百首を残している（『中世百首歌 八』に所収）。ただし当時の義政は作歌技術が熟していたとは言いがたい。実際本稿で取り上げた「足利義政百首」においては、古歌に依拠して一首を成している例が多いことが指摘できる。一例として、まずは義政の「三月盡」詠を挙げる（以下、義政百首からの引用は冒頭に翻字と同じ数字を置いて示した。それ以外の和歌及び歌番号は『新編国歌大観』により、和歌本文には私に濁点を付し、適宜漢字をあてた）。

三月盡

20花ちりて残るかひなき日数ぞと思ひし春をしたふけふかな

この歌は、次の慈円の歌と表現が多く重なっている。

残春

花は散りて残るかひなき春の又さらに色ある遅ざくらかな

（『拾玉集』三七八六）

そもそも歌題が「三月尽」「残春」と、共に春の終わりを詠む歌である。詞の上では「花が散ってしまった後では春の楽しみも無く、残った春の日数もその甲斐が無い」ということを言う初句と第二句がほぼ一致している。義政は「三月尽」題を詠む上で、慈円のこの残春詠を参考にした可能性が高い。また次の義政詠、

荻

43軒ちかくうへしもくやし秋風のおときゝわぶる庭の荻はら

では、

荻原や植ゑてくやしき秋風はふくをすさびにたれかあかさん

（『拾遺愚草』一〇四一、『千五百番歌合』六百十五番右）

の藤原定家詠、特に「荻原や植ゑてくやしき」の部分が参照されているのだろう。家のそばに植えた荻が秋風に音を立てて、その愁いに耐えかねる様を詠む点も同想である。

もう一例、義政の「旅」詠と飛鳥井雅有の詠を比べる。

旅

92はる〳〵に里なき野べに行くれぬこよひも又や草のかりぶし

今日も又里なき野辺に行きくれぬさのみやしもに枕むすばん

（『隣女集』一五六六「旅歌中に」）

この二首では「里なき野辺に行きくれぬ」という表現が一致している。雅有詠では旅中の心細さを「里なき野辺」の語で表現しており、これは他の歌例が見られず、雅有詠の特徴的な表現、あるいは手柄というべき表現である。そうした詞を、義政は自らの「旅」詠に用いたことになる。同題、同想の歌であるため、本歌取りと見ることも難しい。既に見た例でも「残るかひなき」「植ゑてくやしき」など、類例の少ない表現をほぼそのまま踏襲した歌を詠んでいた。これらが「主ある詞」というわけではないにしても、望ましい詠み方ではないだろう。当該百首には同様の歌が他にも散見し、一つの傾向と言える。

また、本歌取りを成し得た例としては、

月

50つもりては老と成ぬるならひさへまだ身にしらで月をみるかな

がある。これは『古今集』『伊勢物語』などに見える在原業平詠「大方は月をも愛でじこれぞこの積もれば人の老いとなるもの」を本歌取りしている。本歌の意を裏返し、自らはまだ若年であるため老いを厭うことなく、心のままに月を楽しむことができる、という。義政自身がまだ若年であることも踏まえて素直に詠み出されたもので、一つの趣向として本歌取りが成立していると言えるだろう。ただし余情に欠けた作であり、やはり未熟さが看取されることは否めない。

こうした例から、当該百首は全体として、縦横に歌語を用いて一首を詠み上げていく段階ではなく、古歌の表現を学び取りながら様々な題を詠む習練期に当たる頃の詠と評価したい。

この百首が義政以外の詠を含むことも考慮する必要はあろうが、現状では若年期の義政歌の特徴を探る資料として本百首が参照されるべきであろう。

「宗空二十首」については本文の残存状況に問題は無く、「足利義政百首」のように他者詠が紛れ込んでいるということも無いようである。二十首のみのため歌風を考えるには心許なく、ここでは「二　概要」に示すとおり、義尚を中心とする歌壇の活動状況の一端を示す資料として貴重であるという指摘にとどめておく。

四　書写者　壬生紀学について

最後に書写者の壬生紀学について述べておきたい。

小槻（壬生）紀学（のりざね）（一六二一―一六四一）は、壬生家出身の地下官人である。壬生家は大夫史（官務）を世襲した家柄で、中世以降、同様に大外記（局務）を世襲した押小路家とともに「両局」と称され、「地下官人之棟梁」としての活動が知られる。

弁官局を取り仕切る立場にあった彼らは、朝廷の文書作成を職掌のひとつとしたが、それに応えるため膨大な蔵書を文庫に保存していた。「官文庫」と称された壬生家の蔵書は、実質的

な「国家の文庫」として朝廷や幕府の支援を受けながら維持され、現在は「壬生家文書」として各所に蔵されている。本写本もその一部である。

さて紀学は、壬生家の嫡流・左大史忠利（一六〇〇―一六六三）の長子として元和七年（一六二一）に生まれている。以降の経歴については『壬生家譜』に次のようにある。

忠利長男
紀學（リザネ）　母

元和七年　月　日　誕生
寛永八年十一月六日　叙正六位上
同　十年十二月八日　元服
同　日　任左近衛将監
同　日　補蔵人
同　日　聴禁色昇殿
同　日　拝賀従事
同十八年六月廿八日　死

寛永十八年（一六四一）、わずか二十一歳で早世しているため事績は少ないが、十年十二月八日に十三歳で元服、同日六位蔵人に補されてのち、そのまま生涯を終えたことがわかる（九）。「足利義政百首・宗空二十首」を書写した寛永十五年時点では十八歳、大分若年の筆である（図1）。壬生家本として今に残った経緯からみても、生前は紀学の所有であったのだろう。

紀学がいかなる経緯で本書の親本を手にし、書写に至ったのか、詳細は不明である。ただ、彼の家系や蔵人という身分が、歌書の書写をはじめとした歌道修練を要請したことは想像に難くない。紀学の祖父孝亮、父忠利は、ともに能書として知られていたようで、筆跡が『慶安手鑑』に所載されるほか、数種の短冊が現存している（図2）。また、彼ら父祖もたどった六位蔵人という職は（十）、天皇に近侍する職掌ゆえに日常的に詠作を求められる機会が多かった。紀学も内裏（明正天皇）月次歌会へ参仕する等、詠歌の事績が記録にみえている（『忠利宿禰記』）。若年での典籍書写は、当人の好尚はもとより、官吏として書道、歌道の素養を高める修練の一環であったと思われる。

このほか紀学の蔵人としての活動は父の日記、『忠利宿禰記』に詳細である。寛永十一年、出納平田職忠との相論に関連して孝亮が洛中を追放されて以来（十一）、壬生家の家運は下降していた。息子に対する忠利の期待も大きかったに違いない（十二）。

だが寛永十八年六月、紀学は不慮の死を遂げる。これについて忠利は以下の事件を記している。

廿八日　（中略）入夜、紀学向内膳（濱島清慶カ）許之由申之、然内膳聞向下鴨之由、紀学又行向下鴨之處、於下鴨被切害、件切手二人有之由、即時逃去之故不知何人所行云々、彼風聞之處、六条相公（有純）、北小路（俊顕）、中川（資長）等馳来被尋訪、周章失前後、死骸于直令送壬生寺、仍当家無地穢、只廿日之暇有之（十三）

六月二十八日、夜になって紀学が内膳の許へ行くといった。内膳が下鴨に向かったと聞き、紀学も跡を追ったところ、そこで二人組に斬り殺されたというのである。

忠利は翌日、家司として仕えていた摂政二条康道を介して、京都所司代板倉重宗にこの事件を申し入れたが、結局犯人はわからなかった。紀学は「市人」との交際があり、今回の事件はそれが災いしてのことであるとの見解も出ているが（『道房公記』六月二十九日条）、詳しいことは知り得ない。

いずれにせよ嗣子を失った忠利の嘆きは「周章失前後」程度では言い表せないものがある。事件の夜、忠利が紀学の匣を開くと、中には庭の梅と百首の和歌が入っていた。また自画像があり、そこに一首の和歌が書き付けてあった。

うれしからぬ月日の身にはつもれとも
わかおもふことそかなはさりけり（十四）

「右披見の處、弥いよ落涙抑へ難き者なり」。忠利の悲嘆を察するに余りある。

壬生家本『足利義政百首・宗空二十首』の表紙は、本紙との虫損の具合をみるに明らかに後補である。右下に花押が付されているが、これは忠利のもの、打付書の外題も彼の筆と思しい（図3）。

おそらくは紀学の死後、忠利が装丁を改め、自らの所持としたのであろう。もとより外題は内容の表示、花押も自署の記号以上の意味は持たない。ただ如上の経緯を通してこの表紙を見るとき、忠利の愛息への情を読み取らずにはいられないだろう。

［注］

（一）井上宗雄・中村文『中世百首歌 八』（古典文庫522、一九九〇）内、『中世百首歌 七』補訂」。

（二）次代の後土御門天皇である可能性もなくはないが、義政が左大臣の時期、彼はまだ歌壇において点者になるほどの地位を有していない。

（三）これは冒頭「兼載」と署名され、巻末に子孫の猪苗代兼寿（一六二八―一六九三）による兼載自筆自詠を証する極書が存したためであるが、本壬生家本の発見により義政百首の零本であった旨、井上氏によって補訂されている。注（一）著書参照。

（四）『玉英堂覯本書目』（164、一九八五・一〇）に一部書影とともに所載。

（五）山下秀忠に関しては、森幸夫「室町幕府奉公衆山下氏」（『国史学』144、一九九一）参照。

（六）この他、『下つぶさ集』（貞頼家集）三一八詞書に「おなじ比、常徳院殿、三条入道前左大臣家、飛鳥井中納言入道家御三方へ御点申入侍らんとて、宗空法師すゝめ侍し三首に」等あり、その交流が見える。なお、三条入道前左大臣（実量）は文明十五年（一四八三）十二月に没しているため、それ以前の興行である。

（七）上の句は学習院大学日本語日本文学研究室蔵本によって補った形により判断した。

（八）『新編国歌大観』解説による。

（九）死去した寛永十八年段階での臈次は差次（『忠利宿禰記』）。

（十）紀学の祖父孝亮は、天正七年に従五位下に叙されるも、同十四年元服とともに逆退、正六位上に叙され蔵人となった（『壬生家譜』）。これ以後、壬生家は六位蔵人を経る家柄となる。

（十一）この相論については、西村慎太郎「近世地下官人組織の成立」『近世朝廷社会と地下官人』（吉川弘文館、二〇〇八〔初出：二〇〇三〕）、田洋子「江戸幕府の成立と地下官人」（『ヒストリア』203、二〇〇七・一）参照。

（十二）例えば、京都大学総合博物館の壬生家文書に収められる『小槻紀学元服次第』〔請求記号：七四・壬生・四一三〕は、忠利が記した寛永十年の紀学の元服式の次第書である。竪紙十八紙に及ぶ長大な継紙で、六位蔵人の元服が如何に盛大かつ費用の嵩むものであったのかを物語る。

（十三）『忠利宿禰記』（取要本）。

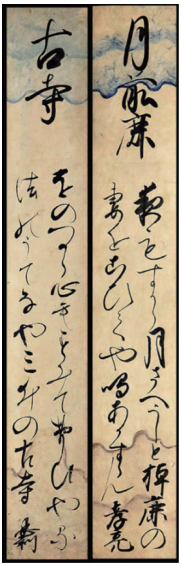
（十四）『忠利宿禰記』（取要本）六月二十九日条。

図1　『詠百首和歌・詠二十首和歌』冒頭

＊参考　壬生紀学和歌懐紙

（京都大学総合博物館蔵壬生家文書〔七四・壬生・六八九〕）

図2　壬生家当主和歌短冊



（右・壬生孝亮短冊、左・壬生忠利短冊／川上蔵）

図3　『詠百首和歌・詠二十首和歌』表紙

＊参考　壬生忠利花押『忠利宿禰記』寛永二十年五月九日条

（宮内庁書陵部蔵〔F九・一三二〕）

《翻刻》

［凡例］

一、底本に京都大学文学研究科図書館蔵本を用い、残欠本の存在する「春二十首」に関しては、学習院大学日本語日本文学研究室蔵本（『中世百首歌　七』〔古典文庫504〕に翻刻）による校異を脇に（　・学）として、左傍点とともに示した。なお、京大本で脱落のある箇所については、本文部分に（　）で補っている。

一、誤写と思われる箇所は左傍点を付し、脇に〔ママ〕、乃至は推測できる語句を〔　〕で記した。

一、虫損により判読不可の箇所は□で示した。なお、残画にて推測可能なものは、その字を□で囲っている。

一、翻刻に際しては底本の状態を極力留めた。改頁の箇所は『　』を付し、丁数・表裏を記した。

一、底本本文に存するミセケチは原則留めている。補入については行内に収め特に示していない。重ね書きは元の字を脇に〔×〕で示した。

一、漢字の旧字・異体字等は底本通り翻刻した。

一、仮名遣いは底本のままとした。変体仮名は通行字体になおし、字母の指摘等はおこなっていない。

一、和歌は、各歌頭に通し番号を付した。

詠百首和歌　　左大臣源朝臣義政

春二十首

立春

1おしなへて霞にけりなけふといへは千里の外も春や立らん

子日

2春ことに•にね（の・学）のひにいつるもろ人は松にひかれていく千世かへむ

霞

3時しらぬ名に•あふ（お・学）冨士の高根さへ春はかすめる色そ見えける

鶯

4さかぬまも人の心の花にまつさそはれきてやうくひすのなく

若菜

5里人のねせりあらひし跡なれや春の野澤の水のにこれる　」一オ

残雪

6春の日のさすやかた•ちも（へ・学）みえてけり木のしたかけの雪のむらきへ

梅

7（たかさとにさそひゆくらむ我やとの）軒はの梅に匂ふはるかせ

柳

8影高みいく世の春と•古（を・学）郷のさほのかはらになひくあをやき

早蕨

9（松か枝のみとりにはあらてをかのへにもゆるわらひをいまやつむらん）

（桜）
10いつくをかわきてとはましをしなへて四方の山への花の盛に
（春雨）
11（草も木もなへてみとりになりぬらし野山かすみてはるさめのふる）
春駒
12難波江にあしのわか葉のもくぬらんいまは春へとあさるあら駒
帰鳫
13こし地にも都にまさる花はあらし春とてかりのないそくらん」一ウ
喚子鳥
14さひしさにたえすや友をよふこ鳥霞む山邊の夕くれのこゑ
苗代
15きのふまてかへすとみえしを山田に水せきいれてたねやまくらん
菫菜
16うちむれてつむやすみれの花かたみめならふ野へにけふもくらしつ
杜若
17まこも草ましま澤へのかきつはた花さきてこそそれとわかるれ
藤
18春をへて藤さきかゝるまつか枝やあらはれやらぬ浪の埋木
款冬
」二オ

19暮て行はるのやとりかさきにほふ庭のまかきは山ふきの花
三月盡
20花ちりて残るかひなき日数そと思ひし春をしたふけふかな
夏十五首
更衣
21したひわひけさ立かへぬあかさりし花の香とりのきぬ〳〵の空
卯花
22ふりうつむ垣ほとそ見る里つゝきさくうの花の雪の明ほの
葵
23この比はみあれをちかみ神山にあふひとるなりかもの宮人
郭公
24なかめ詫ぬ在明の月をかたみにて一こゑすくる山郭公」二ウ
昌蒲
25けふこそはひきて袖にもかくれぬにおふるあやめのなかきねなから
早苗
26あま人はしほくまぬまもみなと田になを袖ぬらすさなへとる比
昭射
27ますらおかするわさならしさほ鹿のよるはすからにみゆるともしは
五月雨
28山河の瀬々ゆく浪も岩こすけすゑはやしたにさみたれの比
花橘

29たち花に匂ひきにけるさらてたに昔を忍ふよはのねさめに
蛍火
30我か身いまあつめぬ宿の窓ちかみいさめかほにも行ほたるか
な
蚊遣火
31しつのめか枕にむせふ蚊の聲（こゑ）にいとゝけふりをたてやそふら
ん
蓮
32池水の上にしけれるはちすこそ涼しき露のやとりともなれ
氷室
33いにしへのたかつの宮のひむろよりそ水（な）へそめけるためしと
やなる
泉
34しはしいま扇の風にわすれ水あたり涼しみむすひくらして
六月祓
35をのつから心すくなるあさの葉をなかすみそきは神もうくら
む
秋二十首
立秋
36身にそしむいつしかけさは吹かくるをとはの里の秋のはつ風
七夕
37年をへて雲井の庭にをくことをうけやひくらん星合の空
萩
38おりあへぬ花のにしきのいと萩に露もみたすな野への秋かせ
女郎花
39朝露にしほれてたてるをみなへしおかきぬ（た撫）〳〵のなこりなる
らん
薄
40よせてしもかへらぬ浪と見えつるやおはな吹しくまのゝうら
かせ
苅萱
41夕されは露もやとりをかるかやの下葉やたへすなをみたるら
ん
蘭
42むつましき色にそ匂ふ藤はかるぬしはたれともしらぬものか
ら
荻
43軒ちかくうへしもくやし秋風のおときゝわふる庭の荻はら
鳫
44なきぬなりかりの涙やをちかたの野へのまはきのうへもしら
れて
鹿
45ますらおもるや山田のひたすらにいとひははてしさほしか
の聲
露
46白玉のをのゝしの原吹風にむすひもとめぬ露そみたるゝ
霧
47立まよふ煙もそれと見えわかすむろのやしまの秋の夕霧
槿花

48月草の色にさけはやあさかほもうつろひやすき花と見ゆらん
駒迎
49いまもなをたえぬためしにひく駒や秋のも中に相坂のせき
月
50つもりては老と成ぬるならひさへまた身にしらて月をみるかな
擣衣
51外山吹夜半の嵐やさむからし衣打なり秋し野の里
虫
52きり〳〵すなれて思ひやすかのねのなかき霜夜をうらみつゝ
鳴
菊
53色も香もあかすこそみれさらに又花なきころの庭のしら菊
紅葉
」五オ
54山高みしくるゝ雲の下もみちはれて木すゑの色やそはまし
九月盡
55かひなしや名におふ秋のなか月もけふをかきりとくるゝわかれは
冬十五首
初冬
56さえかへる空とやいはん神無月春たつけさの風のはけしさ
時雨
57峯こゆる雲に嵐やむかふらん又帰りくるむらしくれかな
霜
」四ウ
58吹はらふ嵐のをとも高砂やおのへのまつの霜のあさあけ
霰
59冬かれのならの葉かしは打そよきあられたはしるをとのさむけさ
雪
」五ウ
60よひのまはなるともしらて朝戸出におとろかれぬる庭のはつ雪
寒蘆
61かれまさる玉江のあしのよをへつゝうらふく風やさむくなるらん
千鳥
62うらみても妻やこぬ身のはま千鳥ふけ行浪にこゑしきる也
氷
63たえ〳〵に岩まもりこしをともなしこほりやはつる谷のしたみ
水鳥
64あはれなり池の氷のとこのうへに鳴ね夜ふかきをしのひとりね
網代
65浪さむみいく世かたしきころも手にたなかみ河にあしろもるらん
神楽
」六オ
66笛竹のよやふけぬらんさ夜かくら聲もすみ行杜の下かけ
鷹狩

67日にかけていさかりゆかんはし鷹の尾上ひきこす鳥のおち草
炭竈
68空さむみをのかねかひも路遠く宮こにかよふ小野の炭やき
爐火
69まとひするあたりもさむくさよふけてかすかにのこるうつみ
火のかけ
歳暮
70けふといへはしつか門松たてをきて千とせの春をむかへかほ
なる
戀十首
初戀
」六ウ
71いつしかと袖そしほるゝ戀衣昨日けふこそおもひ立しを
忍戀
72いかにして人めしのふの山ふかみかよふこゝろのおくをしら
せむ
不逢戀
73さきの世のむくひなるをはつれなきも人のうきにはなさしと
そ思
初逢戀
74こよひより心かはりておしむかなあふにかへんといひし命を
後朝戀
75さゝ分るあさけの袖にくらふれはあはてこし夜はぬれしかす
かは
逢不逢戀
76わすれはやわかれしまゝのおも影をうき身にそへて思くるし
さ
旅戀
」七オ
77思ひわひひとりあかしの浪まくら身をうきねにそ袖ぬらしけ
る
思
78みたれゆくお花か本の露霜にしほるゝ袖はほすひまもなし
片思
79つれなしとさのみはいわしかくはかり思ふとたにも思しらす
は
恨
80わすれては又そうらむるとにかくにいひかひもなき人のつら
さを
雑二十首
暁
81あけぬとておとろくかねのひゝきにもさめぬうき世の夢をし
そ思
松
82和哥の浦や色なき松のことの葉はかきあつめても何〔ママ〕ゝかはせ
ん
」七ウ
竹
83かりそめにうへし軒はのくれ竹や窓くらきまてしけりそふら
ん
苔
84山ふかみたれふみわけし跡ならんたえ〳〵見ゆるこけのかよ

ひ路

85遠さかる聲もはるかに夕しほのみつのこしまにたつ鳴わたる
山　　霧

86ちりひちのつもりそめぬるかたなれや雲井に高き山の尾上は
河

87何とたゝおろかなりける身なせ川世の人なみにありてゆくら
む　　野

88草枕かりねの夢はいなみ野やあさ路吹しく夜半の嵐に　」八オ
関

89いとまあれやおさまれる世はをのつからさらぬとなみのせき
の関もり　　橋

90跡たにもいまはなからのはしはしら遠きむかしをかけてこひ
つゝ　　海路

91をひ風や吹かはるらんこのゆふへかたほにいそく興津舟人
旅

92はる〳〵に里なき野へに行くれぬこよひも又や草のかりふし
別

93かへりこむほとはいつともしら雲の立わかれ行道のはるけさ
山家

94さま〳〵にきくもさひしきすまひかなみねの松風たにの水を
と

田家　　」八ウ

95秋過てのこる田の面のかりの庵露しものみやいまはもるらむ
懐舊

96いたつらに忍ふと何か思ひけんおもひいつれはかへるむかし
を　　夢

97はかなしとわきてはいはしぬるかうちの夢にうつゝのみえぬ
ものかは　　無常

98つく〳〵と思つらねてなけくかなさためなき世のことはりを
のみ　　述懐

99たえてたゝ思しれともいとはれぬ心つからのうき世なるらん
[四段]•悦

100かきりなく君かよはひは久かたのあまてる神もさそまもるら
ん　　」九オ

勅點愚點　五十五首

御製

101おろかなる身にさへいまそ和哥の浦のなみにまきれぬ玉のか
す〳〵　　御返哥

102よしやたゝもくつ成とも和哥の浦のなみの玉そときみしてら
さは

（以下七行分空白）

詠二十首和歌　宗空　」九ウ

原上霞

1みかの原また春さむき川風に山も霞のころもをやかる

幽栖春月　相似幽玄但結句如何

2春の夜の空にならはゝかすかなるすまひを月もあはれとやみ

む　第三句うつり題の心無念歟

遥尋花

3峯の雲汀のなみをしのくとも花さくかたの道はまとはし

見花戀友　下句在等類歟

4手折てやいまはみせまし桜花とはぬはつらきこゝろなれとも

夕雲雀

5旅人の枕かる野の夕ひ[は]りなれも草葉の床たのむらん

雨中郭公　」一〇オ

6村雨のはるゝそおしきほとゝきすなきつる空のなこりと思へ

は

籬瞿麦

7山姫のこゝろの秋の色をまつまかきにうつすなてしこの花

松風忘夏

8すゝしきは浪こす礒の松のねのあらはれぬへき秋かせそふく

萩漸盛

9夜な〳〵の露やそむらむ昨日よりけふは色[そ歟]とふ庭の萩原

深山鹿

10我をこそすつる身山と思つれしかもうき世の外に鳴也

見月思旅

11こよひ又あはれいつれの野へにねて宮こ戀しき月を見るらん

月前遠鐘　」一〇ウ

12そことなく深行鐘は音信て人のしつまる夜半の月影

紅葉待霜

13霜に又色かはれとやひとかたは露もしくれもそめのこすらん

時雨廻岡

14いり日さす峯の庵になかむれはしくれそまよふ岡[ママ]野への里

袖氷重夜

15山おろしのさむきいく夜か苔ころもかたしく露も氷はつらむ

塩竈雪

16ふりうつむ雪に中〳〵塩かまのかすさえ見えて立けふり哉

巌頭苔

17さゝれいしのその世はいつとしらねともこけのむすまてなり

にける哉

樵哥入山　」一一オ

18山かつの哥とのみおもふ一ふしもそのさましらぬなけ木をや

こる

半夜旅泊

19あか月の鐘をもまたてとまり舟おもふいり江をこきわかれぬ

る

述懐言盡

20いまは身にことの葉もなしうしといひつらしといひしほとそ

悲き

（二行分空白）
右廿首和哥者文明十七閏三中旬之比右京亮藤原秀忠
興行之人数左衛門尉藤原秀忠以上三人隠作者書之集之
室町殿于時
御所様へ御點被申也六十首内御點十一首出貞頼四首予
五首彼一巻者秀忠許在之御詞之加候分書写之候者也　」一一ウ
寛永十五年八月十三日
小槻紀學書之
（以下十行分空白）　」一二オ

［付記］
貴重な資料の閲覧に際し高配を賜った京都大学文学研究科助教の木土博成氏に深謝申し上げる。本稿はJSPS科研費（課題番号MKK942H：研究代表　川上一）による成果の一部である。

（おおやま　かずや・同志社大学文学部助教）
（かわかみ　はじめ・慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程）